

日本語予備教育における留学生を対象としたレポート作成指導の試み

木戸 恵子、中嶋 めぐみ、中村 祐理子

(留学生別科)

A Teaching Experiment of Report Writing for Foreign Students in Japanese Language Programs

Keiko KIDO, Megumi NAKASHIMA, Yuriko NAKAMURA

(International Division)

目白大学留学生別科では、中級後半および上級クラスに所属する学生を対象に「論文作成」の授業を開講している。この授業の受講者の中には大学院進学を希望する学生が多く、研究計画書のための文章表現力の向上を意識している学生もいる。そのため、昨年度までの本授業は、論文ならびに研究計画書の作成に資する情報収集能力（論文読解）、文章表現力の向上を柱として実施されていたが、今年度の春学期は、学生が①テーマ および「問い」を各自で選定し、②3000字以上のレポートを作成することに焦点を絞り、授業を進めた。学期前半では、身近な生活環境に存在する様々な問題に気づく力、それらについて考える力を高めるために思考トレーニングを取り入れた。また、毎授業の終了時には「大福帳」を用い、学生自身で作成作業の進捗状況ならびに次回の予定を確認し、担当講師と共有した。その結果、学生には「考える」、「書く」という姿勢が形成され、自ら立てた「問い」に従い、レポートを作成することができた。

キーワード：大学院進学、レポート作成、思考トレーニング、問い立て、大福帳

はじめに

目白大学留学生別科（以下、JALP という）では、日本語中級後半（N2）および上級（N1、N1S）クラスの留学生（以下、学生という）を対象に「論文作成」の授業（以下、本授業という）を選択科目として開講している。本授業を受講する学生の多くは、大学院および学部進学を希望している。そのため、本授業は、大学院の研究計画書、進学後に課せられる論文やレポート作成に資する情報収集能力（論文読解力）、アカデミックな日本語の文章表現力の向上を目標に実施されてきた。進学後の論文・レポートの作成には上記以外にも、自分でテーマを選択し、「問い」を立て、調査・分析をし、文章を書くという「考える」過程も重要である。過年度、本授業は学生の日本語力不足からアカデミックな文章

作成のための「書きことば」習得に学期中三分の一程度の授業時間をあてざるをえない状態であった。しかし、そうすると、論文・レポートのように一つのテーマに従い、3000字を超えるような、ある程度の長さ（分量）を持つ文章を作成するために必要な時間が十分には確保できなかった。そこで、2018年度春学期のシラバスを組むにあたり、担当講師3名で話し合い、本授業では大学院や学部で課せられるレポート作成の疑似体験をさせよう、つまり、3000字以上のレポート作成を第一の目標にかかげようということになった。この決定には、過年度の授業実施後アンケートにおいて、受講した学生から「日本語で長いレポートを書いてみたかった」という意見が寄せられていたことも影響している。また、昨今、「考える」ことを苦手だとする学生も多く、アウトプット系のクラスでは、学生から「書くこと

が思いつかない」という声が聞かれた。そこで、長文作成とともに、「考える力」を伸ばすことも目標に加え、シラバスを再構築し、授業を実施した。

本稿で本授業の実践を報告する。

1. 学期前準備—目標・シラバス決定の経緯—

従来、本授業は週に3コマを有するため、複数の講師によって実施されてきた。2018年度春学期は3人の講師で担当することになり、学期開始前の春休み期間中にミーティングを開き、シラバス作成について話し合った。3人とも、過年度に本授業を担当したことがあり、その経験や反省を生かした授業をしたいという思いがあった。その結果、「はじめに」で述べた通り、学生に、大学院・学部進学後に直面するであろうレポート作成の疑似体験をさせるということを第一の目標にすることで意見が一致した。

では、大学院および学部でレポートを作成する際に、学生に必要な能力とは何か。三宅(2002)は、学部の日本人学生にレポート作成を指導した「現代日本語表現」の授業実践において、高校までの「表現」教育の不足、〇×式教育/白黒判断教育がベースにあるため単語レベルの短絡的表現が横行、正誤判断への興味の集中、プロダクトの重視・プロセスの重要性に対する認識不足、受身の学習態度等を、問題点にあげている。その上で、論文・レポート作成には次の項目に対して大学生の自覚や認識が必要であると述べている。その項目とは、①誤字 ②語彙 ③書きことばと話しことばの違い ④構成 ⑤研究の手順 ⑥発想 ⑦考察 ⑧推敲 ⑨その他である。JALPの場合、①から④までは、各レベルにおける必修科目の「文章表現演習」の授業で学ぶ機会がある。また、JALPにおいて、長らく大学院進学クラスの「文章作成技術」の授業を担当する山口・鈴木は、彼らの実践報告(2015)で、上級レベルの学生のレポートと小論文の問いと答え(規定文)における問題点の類型化を試みているが、「問題の要因は文章や表現力ではなく、内容であることを強く認識した」とし、「適切な問とは個人の意見を引き出すものであり、適切な答えとは(読み手に対して^{注1)}説得力を持っているものであると言えるだろう」

と述べている。そして、内容的な問題に対する指導のさらなる重要性を指摘している。

この二つの実践報告の内容を参考に、前出の三宅(2002)が挙げた④～⑧の項目の指導を中心に、本授業のシラバスを定めることにした。

2. 「論文作成」授業の概要

2018年度春学期の本授業の概要は以下の通りである。

(1) 目標

今学期、下記の3項目を目標とした。

- ① 3000字以上のレポートを書く。
- ② 各学生のレポートのテーマを深め、考える力、思考力を伸ばす。
- ③ 論文・レポートを読む。

学生が自ら決めたテーマに沿って、比較的長い文章を書く体験をすることを第一の目標に定めた。また、その過程において、身の周りの事例から問題を発見し、レポートの「問い」を立てたり、考察をしたりする思考力を向上させたいと考えた。さらに、論文・レポートの構成や表現を意識化させるために、8ページ程度の論文を読むことを目標に加えた。

(2) 授業時間数および実施曜日

本授業の授業時間数は1週間に3コマ(60分^{注2}×3)で、月曜日の4時間目(13:00～14:00)と5時間目(14:10～15:10)、木曜日の5時間目であった。

(3) 受講学生

受講学生は中国人3人で、そのうち2人(男女各1人)が上級(N1)クラス、1人(男性)が中級後半(N2)クラスに在籍していた。学期初めに簡単なレディネスについてのアンケートを行ったが、3人とも自国の大学では母語で論文またはレポートを書いた経験はあるが、日本語ではまだ書いたことがないとの回答であった。また、アンケートからは、「レポートは、論証はあまり重要ではなく、自分の意見を明確に主張することが大切である」という強い考えを持っている学生がいることもわかった。

(4) 担当講師

2018 年度春学期は、3 人の講師で 1 週間に 3 コマある授業を 1 コマずつ担当した。

一科目を 3 人で担当するという機会はなかなか無い。担当が決定された当初は、指導内容の分担、授業の引継ぎなどの連絡方法の難しさが予想されたが、反面、学生のレポート添削作業を 3 人で分担するというレポートを書く段階におけるメリットも考えられた。つまり、講師それぞれに担当する学生を決め、学生と一対一で話し合いながら指導ができるであろうし、また、講師 1 人にかかる添削などの労務も軽減できると考えたのである。実際、上記(3)で報告したとおり、本授業を受講した学生は 3 人で、一対一のレポート添削指導が実現した。

3. 授業の実践

(1) 活動

2.(1)で述べたそれぞれの目標に対し、授業中の活動を定め、実施した。以下、活動について説明をする。

(i) 思考トレーニング

思考トレーニングは、授業の始めに 15 分程度で実施した。各学生は 10 分間で問題を考え、5 分程度でそれぞれの答えを発表した。レポートを書き始めるまで、1 週間に 1、2 回のペースで実施した。

この活動の目的は、物事は多くの要素で構成されており、多面的であることを理解し、様々な構成要素を短時間で考え、引き出せるようになることである。また、レポートのテーマを考える際に、「中日貿易の問題」のような具体性に欠ける、大きなテーマしか考えられない学生に、大きなテーマの下位には様々な観点があることを考える習慣を身につけさせるためであった。思考トレーニングの問題は 6 種類用意した。市販の日本語教材の中から思考トレーニングに適した問題や担当講師が作成した問題を使用した。考えることを苦手とする学生の「考える」ことへの心的バリアを低くするため、思考トレーニングは、簡単に考えられる、難易度の低い問題から始めた。以下に問題の種類を紹介する。

① 語彙グループの中から、異なる性質のことは

を探し出す。

- ② 「なぜ」の問いに対して、理由・原因を答える。
- ③ あるテーマについて、キーワードを考える。
- ④ ある事柄について、賛成・反対の意見表明をし、その理由を説明する。
- ⑤ 日常生活の中から、「なぜ（問い）」を考える。
- ⑥ 日常生活の中の「なぜ（問い）」に対して、答えを考える。

(ii) テーマを考える

テーマの絞り込み（選定）が、学生にとって論文・レポート作成の一つめの「壁」とであると想定し、第 1 回目の授業から学生に問いかけを始め、第 6 週め(5 月中旬)まで継続的にテーマについて考え、テーマを絞り込んでいった。

まず、1 回目の授業では「今、興味があること」を複数リストアップさせた。そのリストの中から一つのテーマを取り出し、約 6 週間をかけて「興味を持った理由」、「何が知りたいのか（問い立て）」、「調査方法」などについて、各学生に考えさせた。何種類かのテーマシートを用意し、授業中に学生に書き込ませ、彼らの考えを記述させた。

(iii) 論文読解

アカデミック・ジャパニーズ研究会編著『留学生の日本語③論文読解編』（アルク）の中に掲載されている「企業内研修にみる文化摩擦」を講読した。これは、荒木晶子（1991）『異文化へのストラテジー』（川村書店）を、教材用に約 5600 字で論文形式に構成されたものである。3 コマの授業を使い、内容、構成を確認しながら、この論文を読んだ。

(iv) 資料収集

各学生のテーマに応じて、論文・報告書などを読み、情報を収集した。文献検索に取り掛かる際には、目白大学新宿図書館に協力を仰ぎ、OPAC や CiNii の使い方の紹介をした。また、文献による情報収集だけではなく、アンケート調査を実施した学生もいた。担当講師は、シラバスを考える段階（学期開始前）の時点では、資料収集は書き始める前までに終わっていると想定していたが、実際には資料収集は「書く」作業に入ってから続いた。

(v) 「書く」作業

学期中盤（6 週め）以降は、各自でレポートを書き進めた。各学生には担当講師がつき、一対一で話し合いながら添削をした。表 1 に示したように、学生は添削を担当する講師の授業時間には講師と話し合い、その他の授業時間に書き進めた。2.(4)で述べたように、学生 3 人に講師が 3 人という恵まれた環境だったため、2 時間かけて書き進め、週に 1 回 1 時間は担当講師と修正をする時間が設けられた。講師と学生の間で何回も原稿のやり取りをし、推敲を重ねた。

表 1 学生の「書く」作業の授業スケジュール

	学生 1	学生 2	学生 3
月曜日 4 時間目 （木戸）	講師と 修正	一人で 書く	一人で 書く
月曜日 5 時間目 （中嶋）	一人で 書く	一人で 書く	講師と 修正
木曜日 5 時間目 （中村）	一人で 書く	講師と 修正	一人で 書く

(vi) 「大福帳」の記入

振り返りのためのシート（以下、「大福帳」という）を用意し、月曜日と木曜日の授業終了時に学習したこと、自分で行ったことおよびその感想を書かせた。そして、コメントや質問があった場合は、その日の担当講師が回答を記入し、学習者に「大福帳」を戻した。「書く」作業が始まってからであるが、学生によっては、その日の授業の振り返りをするとともに、次の授業で何をすればいいのか等、自分自身で進捗状況を把握しつつ、次の授業ですべきことを確認していた。

上記(i)～(vi)の活動の実施については以下、表 2 にその実施時期を記した。

(2) 学生のレポート

本授業で、学生が作成したレポートは表 3 の通りである。3 人とも本授業の目標として設定した 3000 字という字数を大幅に上まわることができた。学期終了時に 3 人のレポートをコピーし、論文集として体裁を整え、3 人に配付した。

表 2 実施内容と実施予定

実施内容	週	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
(i) 思考トレーニング																	
(ii) テーマを考える																	
(iii) 論文読解																	
(iv) 資料収集																	
(v) 「書く」作業																	
(vi) 「大福帳」記入																	

表 3 各学生のレポート名と字数

	レポート名	字数
学生 1	「なぜ日本で民泊は人気があるのか」	4466 字
学生 2	「日本語における若者言葉使用の現状」	4038 字
学生 3	「サプリメント摂取における中日比較」	5825 字

(3) レポートの評価

「テーマを決め、調べてレポートを書く」ことに慣れていない学生だったため、3000 字以上書いていること、調べたことに基づいて書くという 2 点に評価のポイントを絞った。

(4) 学生からの授業評価

春学期終了時に、本授業に関して、学生がどのような感想を持ったか、半構造化式のインタビューを行った。調査方法は下記の通りである。

① 調査方法：半構造化インタビュー

- ② 調査日：2018年7月23日（月）5時間目
 - ③ 時間：講師2人で学生1人につき約20分の聞き取りを行った。
 - ④ 質問事項：質問は以下の9問であった。
- 問1 長いレポート（3000字以上）を書いたことについてどう思うか。
- 問2 レポート作成過程で大変だったことは何か。
- 問3 教室活動の中でよかったものは何か。また、その理由は何か。
- 問4 自分自身で上達したと思うことはどんな技能か。
- 問5 授業を通して気づいたことは何か。
- 問6 「大福帳」についての感想
- 問7 自分が書きたいこと、調べたいことが書けたか。
- 問8 国でのレポート作成の経験（レポートの長さ、指導法、テーマ決定の過程など）
- 問9 講師3人による指導に関する感想

このアンケート調査の結果については、次章以降で詳しく述べる。

(5) 講師間のジャーナル

3人の講師の間で、下記の二つの文書に授業の報告を記載した。

- ① MEG-Web上の授業報告
- ② 学生ごとの進捗表

4. 授業実践の結果

学期終了時に行った学生へのインタビュー、学期中に学生が記録した「大福帳」、および講師間のジャーナルに基づいて、実践結果を述べる。

(1) インタビューの結果

インタビューの各設問の回答は以下のとおりである。インタビューの回答の文言は原文ママ、（ ）内は筆者の補足である。

問1 長いレポートを書いた感想

3人とも難しかったが、講師のサポートを得て、書きあげることができたと、達成感を持っていた。また、序論・本論・結論といった文章の構成と、デー

タの比較、データの説明方法などのレポート作成の要素が勉強できたと述べている。

問2 レポート作成過程で大変だったこと

「日本語で書く過程」とともに、レポートの内容に関して「考える」、「調べる」過程が大変だったとする回答が多かった。回答の内容は、大きく言語技術的なことと、論述する過程に関することに分かれた。前者では、硬い書き言葉による記述、後者は適切なテーマへの絞り込み、資料収集、集めたデータの読み込み、テーマに沿っているかどうか照合しながらの文章作成が難しかったと述べている。さらに、テーマに関する知識不足への気づきについても述べている。

問3 やってよかった教室活動とその理由

3人とも思考トレーニングをしてよかったと回答した。「自分でちゃんと考える練習がいい」、「もし、最初いろいろ練習しなかったら、日本語で長いレポートを書くのはもっと難しかった」、「自分の考え方が固いから（思考トレーニングのような練習が役に立った）」と理由を述べ、自分で考えることの重要性を挙げている。また、学生の1人は論文読解が有効であったとし、「論文の方法（構成、論述の方法）を見つけることができた」と理由を述べている。

問4 自分自身で上達したと思う技能

学生が上達したと思う技能は、「論文や資料の探し方」、「考えること（考察すること）」、「日本語によるレポートの書き方（構成など）」であった。

問5 授業を通して気づいたこと

学生3人がレポートの文法や構成が今まで授業で書いてきたものと違うとしていた。

問6 「大福帳」に対する感想

「大福帳」は作業記録、質問とアドバイスの場となり、3人ともに高評価であった。理由は以下の通りである。「毎回、授業で実施したことを振り返れた」、「先生にわからないことが聞けた」、「先生のアドバイスが聞けた」。

問7 自分が書きたいこと、調べたいことが書けたか

3人とも概ね書きたいことが書けたと述べている。

問8 国でのレポート作成の経験

3人とも自国（中国）でレポート（1000～2000字程度）や卒業論文（4000～8000字程度）を書い

た経験があった。卒業論文の作成では、指導教員との検討を経て、テーマを決定したとのことである。また、2人の学生は、今学期本授業で、指導した書き方と自国での卒業論文の書き方には違いがあると回答している。具体的には、自国のレポート作成の際は表、グラフなどのデータの説明は重要ではなく、自分の意見を明確に書くことが大切だったと述べている。

問9 講師3人による指導に関する感想

3人とも講師と担当する学習者が一対一であったこと、各講師から様々な意見やアドバイスが得られたことがよかったと評価している。

(2) 学習者による「大福帳」の記述

「大福帳」の記述内容は大きく分けて、難しさに対する言及、自分がすべき課題への言及、気づいたことに関する言及の三種類についてであった。以下に、「大福帳」の記述内容をあげる。

難しさに対する言及には、「考えを簡単に文で書くことができない」のように、日本語で表現すること自体の難しさを述べるものと、「アンケートを作るとき（自分は）何が知りたいかわからない」のように、内容に関する難しさを述べるものがあった。

自分がすべき課題への言及には、「次の内容についてもっと資料を探す」、「若者言葉の共通点、生まれる変化とか、普通の言葉にどんな影響を与えるかについて考える」等、執筆の手順やレポートの内容を深めるためにすべきこと等が述べられていた。

気づいたことへの言及は、様々なタイプのものがあった。例えば、「（テーマの観点を探しているとき）だいたい皆さん知っている観点が多い。自分で論文を書くとき新しい観点を提出しなければならない」という記述をしている。授業において学生たちが考えた観点にはそれほど多くのバリエーションがなく、3人とも似たような観点を挙げたことを受けて書かれたものである。この学生は大学院進学を希望しており、今後、大学院での研究にはオリジナリティが求められることに関する気づきが述べられたものであろう。

(3) 講師間のジャーナル

次に、講師間で共有したジャーナルについて述べ

る。本授業は3人の講師で一つのクラスを担当したため、目白大学のMEG-Web上の授業報告および、学生の進捗表により、各学生の作業状況を共有した。表1でも触れたとおり、講師ごとに担当する学生を決めているが、授業においては担当以外の学生の質問に対応したり、作業の進め方に対するアドバイスをしたりするため、各学生のレポートの進捗状況を共有する必要があった。授業報告と進捗表をまとめて、講師間のジャーナルとし、以下に記述内容を紹介する。

ジャーナルの性質上、各学生のレポート作成の進捗報告の記述が中心であったが、それ以外に、特に学生が書き進める上での問題点および、学生の取り組みに対する記述も多く見られた。

問題点として申し送られたものは主として、アカデミックな文章作成に必要なスキルが十分に使えていない点であった。例えば、データの集計のしかたがわからない、表が作成できない、テーマに沿わない記述がある、データの分析や記述が不十分である、担当講師が指摘した点が十分に理解できていない等である。これらは次の授業へ指導を引き継ぐために各学生が抱える問題点について述べたものである。

学生の取り組みに関する記述には、学生の行動の変化が記されていた。3人とも学期初めは、講師からの指示を待つという姿勢であったが、レポート作成段階になると、各自パソコンの前で自分の作業に向かい、不明な点を各自その時間の担当講師に進んで質問し、授業終了時には書き進めたところまでをメールで提出するという一連の作業が自主的に行えるようになったというものである。ただし、内容を深めることに関しては、まだ講師に頼ろうとする姿勢が抜けなかったとの記述もあった。

5. 考 察

上記、実践の結果をふまえ、レポート完成までの活動を通し、本実践にあたって立てた三つの目標が達成されたかどうかを振り返りたい。

まず、目標の一つ目として「3000字以上のレポートを書く」ことを目指したが、これについては上記3.(2)表3で示したとおり、3人とも十分な長さのレポートを書くことができた。このことは、一対一の

指導において、書くべき内容を指導したことによるものと考えられる。自国でのレポート執筆時には、データの説明より自分の意見を書くことに主眼が置かれていた。そのため、本授業では、学生に、収集したデータや資料を一つ一つ正確に説明することを徹底させた。すなわち、データにどのような傾向があるかを考えさせ、データ間の関連性に気づかせ、そこから何が言えるかを導き出させ、丹念に記述させた。詳細に記述することにより既定の長さを十分に満たすことができたものと考えられる。

次に、二つ目の目標としてかかげた「各自のレポートのテーマを深める（考える）力を養う」について、学生のテーマ決定を例にして述べたい。テーマを決定する過程においては、二つの働きが作用したと思われる。一つは、講師との一対一のテーマ検討である。学生はテーマを考え始めた段階では非常に大きなテーマを取り上げていた。しかし、この検討を経て、各自があげたテーマについて、十分に知識がないこと、問題意識がないことに気づいた。もう一つは思考トレーニングである。学生の「考える」ことに対する心的バリアを低くするためにこれを導入していたが、この活動中に行った、日常生活の中の「なぜ」の問い立て、そして、それに答える練習も、大きなテーマから身近なテーマへと視点を転換させるための一助となったと思われる。「考える力」を身につけることは一朝一夕ではできないことであるが、インタビューでは3人ともが思考トレーニングについて、「考える」練習となったと述べていることから、「考える」ことに対して抵抗が少なくなったと思われる。

最後に、比較的短い論文の読解を目標としたが、論文読解によって、構成、論述の方法が理解できたというインタビューの回答があり、その有効性が確認された。

6. 授業運営時に浮上した問題

(1) 受講学生のオートノミー

4.(3)で述べたように、自立的にまだ内容を深めることが十分にできない学生のオートノミーをどう育てるかが、今後の課題である。

この点については、学期前の教師間の話し合いに

より、敢えて授業では講師の助言はできるだけ少なくし、学生自身で考えさせることを心がけた。

(2) 担当講師の連携

(i) 充当される講師の数

今学期は3人の講師で指導に当たったが、毎学期複数名が充当されるわけではない。過年度の学期によっては、講師1人で指導に当たったこともあったが、そのような場合、今学期のような個別的な指導は困難であろう。複数名の講師で担当することが望ましい。

(ii) 講師間の連携

学期中は、講師3人全員で話し合える時間がかなり限られ、講師間の連絡、連携が不十分だった。今学期のような授業展開は初めてだったため、ジャーナルにレポートの進捗や学生の様子をかなり詳細に記入したが、充分伝わらず、指導の過不足が生じた。

(iii) 各講師のレポート指導に対する取り組み方の違い

それぞれの講師が、どこまで踏み込んで指導するか。これは各講師のビリーフにも関わる問題である。3人の講師全員の論文作成指導に対するビリーフがはじめから一致していたわけではないが、本授業では、とにかく学生に考えさせ、一つのテーマを徹底的に追求させようという意見があり、最終的にはこの方針で指導した。しかしながら、学生の文章表現力、思考力が不十分であったため、講師がより深く介入せざるをえない状況が多々あり、講師によって、その介入度合いに違いが生じた。

今後は、複数講師で担当する長所を生かしつつ、今回問題となった指導方法のズレを解消すべく、講師間のジャーナルの活用方法を再検討する。さらに、定期的にミーティングを持つなどして指導方法を共有し、調整する。

(3) 成績評価方法の検討

今学期は、学生の成果物であるレポートは評価したが、「考える」過程については、それをどう評価するかを検討しきれないまま学期末を迎えてしまった。ルーブリックなどを活用した形成的評価も今後の検討課題であろう。

(4) IT 環境

(i) パソコン数

今回は、学生が少なかったため、JALP 所有のノートパソコンを教室に持ち込み、教室でレポート作成作業を行った。しかし、学生数が多い場合は、パソコンが設置されている教室の使用を考えなければならないが、その場合、常時その教室が確保できるとは限らない。今後、安定的にパソコンが使える環境の確保が問題になろう。

(ii) Wifi 設備

JALP の教室においては Wifi が完備されていない。Wifi はインターネット検索によるデータ収集および、講師への課題提出等で使用するため、パソコン環境同様、Wifi が安定的に使用できることが望ましい。

おわりに

以上、本授業では目標に沿って、思考トレーニング、論文読解、長文のレポート執筆の指導を行った。思考トレーニングはテーマを深く考える力を養うということに役立った。そして、論文読解により、論文の構成や表現について意識化することができた。この二つが長文レポートの執筆につながった。学生の学習態度は執筆過程を通して、考えて書くことに対する抵抗感が少なくなり、積極的になったと思われる。しかしながら、レポートの内容を自分で深める、論旨に沿っているかどうかを見極めるといった、学生のオートノミーが十分に養われたとは言い難い。また、レポートの評価法や指導法については、

学期開始前だけでなく、学生の能力や状況により学期中も十分に検討する時間を設ける等、講師間の連携を深める余地がある。以上の2点を今後の課題として、稿を閉じたい。

《注》

- 1 (読み手に対して) は筆者が原文に書き加えた。
- 2 JALP の授業時間は学部・大学院の授業時間とは異なり、1コマ60分である。

《参考文献》

- アカデミック・ジャパニーズ研究会編著 (2015) 『大学・大学院留学生の日本語③論文読解編』, アルク
- 岡まゆみ (2013) 『中・上級者のための速読の日本語【第2版】』, The Japan Times
- 小出慶一 (2008) 『日本語を学ぶ人たちのための日本語を楽しく読む本・初中級』, 産業能率大学出版部
- 三宅和子 (2002) 「日本人大学生の論文・レポート作成における『日本語』教育」, 『第14回日本語教育連絡会議報告』, pp.88-93, 第14回日本語教育連絡会議事務局
- 山口恵子・鈴木秀明 (2015) 「レポートと小論文クラスにおける上級日本語学習者の問題点-不適切な問と不適切な答えの分析を通して-」, 『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル7』, pp.10-17, アカデミック・ジャパニーズ研究会
- (受付日:2018年10月29日、受理日2018年12月5日)